

第2章 文化的景観の概要と葛飾柴又らしさ

1 文化的景観とは

日本の多様な気候風土の中で、人は、地域の自然と関わりながら生業を営み、長い年月をかけてその土地ならではの特徴的な景観を築きあげてきた。文化的景観とは、このような歴史と風土に根ざした暮らしの景観を指す。

文化的景観は、文化財保護法で定める文化財の一つである。その中で、国の基準に照らして地方公共団体が保存の措置を図り、重要なものとして文部科学大臣が選定したものが重要文化的景観である。選定は地方公共団体からの申し出に基づき行われる。

ユネスコが取り組む世界遺産の保護においても、「Sites (遺跡)」の定義に含まれる「自然と人間の共同作品」に相当する概念を「Cultural Landscapes」としており、文化的景観と和訳されることが多い。

文化財保護法の「文化的景観」と世界遺産の「Cultural Landscapes」は、それを守り伝える仕組みに違いはあるものの、人が自然に働きかけて形成された景観の中に文化性を見出し、これを尊重した発展の在り方を促している点では共通している。

「葛飾柴又の文化的景観」もまた、東京低地、江戸川、下総台地等、地形地質との関わりの中で形成されてきたものである。いわゆる「葛飾柴又らしさ」と呼ばれるものも、自然、歴史、暮らしを丁寧に見ていくことで、それがどのようなものに対する共感で、どのように生み出されてきたのかを具体的に知ることができよう。

以下に「葛飾柴又の文化的景観」の概要をまとめ、「葛飾柴又らしさ」を概観する。文中の「**太字**」は、「**重要な構成要素**」として保存計画に位置付けられているものを指す。重要な構成要素とは、「葛飾柴又の文化的景観」の特徴と価値を理解する上で不可欠な要素として保存計画に位置付けているものである。令和4年3月現在、区域、道、水系、敷地、建築物、工作物、機能の7種類、83件を特定している（巻末資料編41～48ページ参照）。

2 葛飾柴又の文化的景観の概要

(1) 位置及び沿革

【位置】(図1参照)

葛飾区は東京都の北東端に位置し、東は江戸川を挟んで千葉県松戸市、西は荒川を挟んで墨田区と向かい合い、中央部には中川及び新中川が南流する。北は足立区及び埼玉県の八潮市及び三郷市、南は江戸川区と接している。

また、葛飾区は、東京低地の東端に位置するいわゆる海拔ゼロメートル地帯であるが、東部は西部よりもやや高い。柴又は、江戸川と中川で挟まれる区東半の南部に町

域を広げ、東は江戸川に面し、西は中川東岸の新宿と隣り合う。

【新宿と水戸道、佐倉道】 (図2参照)

新宿は、近世には水戸佐倉道の宿場町として栄えた。日光・奥州街道から分岐して東に伸びる水戸佐倉道は、中川を渡って新宿で北東にさらに分岐して向きを変え、金町村 (現在の葛飾区金町) で江戸川を越えて松戸宿 (現在の松戸市松戸及び本町) に至る水戸街道となる。金町村の渡船場には幕府が金町松戸御関所を置いていた。

また、新宿では、水戸佐倉道から佐倉道が分岐して南東に伸びる。水戸道も佐倉道も、近世以前からの道が整備されたもので、近世には五街道に準ずる脇街道とされていた。佐倉道の南方には、かつて隅田川を渡って下総

国府、上総国府、又は常陸国府に至る古代東海道が東に向かって伸び、所々で水戸道や佐倉道に繋がる脇道を分岐しながら、太目川手前で佐倉道と合流していたと考えら



図1 葛飾区の主要な河川と隣接自治体

れている。

【柴又の沿革】

歴史を古代にさかのぼる柴又は、前述のように北方に水戸道、南方に佐倉道が通り、西方にはこの2つの脇街道が合流・分岐する新宿を置き、東は江戸川に面して渡河に適した場所を持っていた。早くから集落が形成されたと考えられるが、発展の様子が詳らかになるのは近世後期頃からである。近世には柴俣村と称される農村であった。

柴俣村は、明治22年の市制町村制施行で金町村

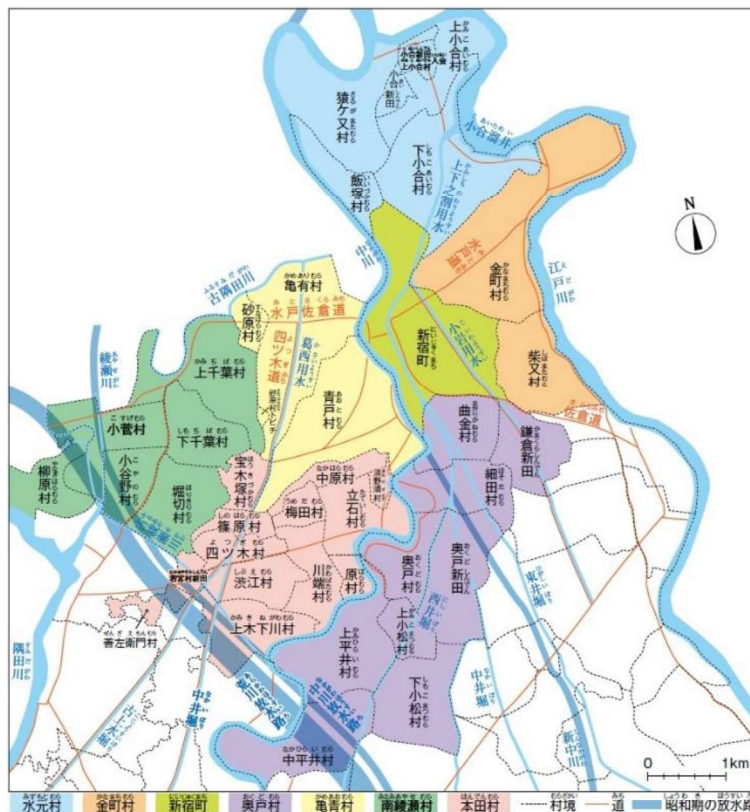


図2 明治22年の市制町村制施行で成立した7町村と江戸時代の村

(大正14年に金町に改称)の一部となる。昭和7年には東京市に編入されて、金町の区域は葛飾区金町、柴又は葛飾区柴又町となった。昭和18年には東京府と東京市が廃止されて東京都が誕生し、東京都葛飾区柴又となって今日に至る。

(2) 地形と歴史 —古代・中世—

【東京低地の微高地】(図3参照)

葛飾柴又は、海拔3m前後の微高地を中心に発展してきた。この微高地は、東西に伸び、その基盤はかつての海岸線に形成された砂州と考えられている。古墳時代後期には微高地上に集落が営まれ、もとは漁労も農耕も行いながら生活し、社会の統治機構が発展する中で、古代を境として農村としての性格を強めた様子がうかがえる。

【太日川と下総台地】

葛飾柴又は、律令制による国家体制下では下総国葛飾郡大嶋郷に属していた(正倉院文書「養老五年下総国葛飾郡大嶋郷戸籍」)。大嶋郷を構成する三里のうち葛飾柴又は嶋侯里しままたの比定地とされ、その地名から川の合流点に近い湿地状の堆積地に微高地が島のように点在するような地形であったことが想像される。この頃、江戸川は太日川と呼ばれ、渡良瀬川の下流を成していた。下総国葛飾郡は、太日川の両岸にまたがる南北に長い広大な郡域を有しており、大嶋郷は太日川右岸の臨海部に位置している。

葛飾柴又の対岸には、蛇行部内側を成す低地の東方に標高20mほどの下総台地の断崖が南北に伸びている。この南方、断崖が水衝部となる辺りの台地上には下総国府が置かれていた。現在の千葉県市川市国府台に当たる。

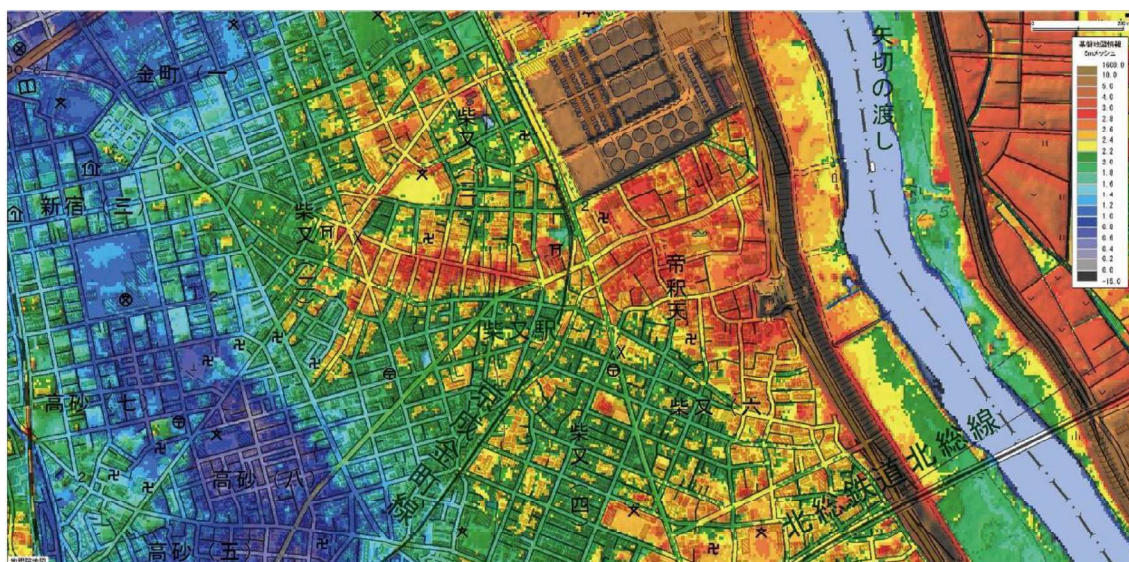


図3 柴又地域地形段彩図

【下総国府と国分道】

葛飾柴又の微高地を東西に通る「**国分道**」は、下総国府に通じる重要な道であった。現在も沿道には古墳跡を残す「**柴又八幡神社**」（図4）や大同年間（806～810）創建と伝わる「**真勝院**」が境内を開く。真勝院は、近世には柴又八幡神社の別当寺であった。国分道の沿道からは、漆器皿や墨書土器を含む奈良時代の遺物も発見されている。



図4 国分道に面する柴又八幡神社

国分道が太日川に突き当たる辺りは、川の瀬に当たり、波蝕で表れた下総台地の基盤岩が安定した河床を成し、渇水期の干潮時には川を歩いて渡ることができた。中世には“がらめきの瀬”等と呼ばれ、軍事上の要衝ともされたが、人馬による交通を支える重要な渡河地点として、葛飾柴又の発展を支えてきた。

（3）地形と歴史—近世の交通ネットワークと柴俣村—

【江戸川の誕生と武蔵国葛飾郡】（図5参照）

近世初頭の治水工事により、もともと東京湾に注いでいた利根川の流路は、千葉県銚子市で太平洋に注ぐように東へと移された。この時、太日川に利根川の水の一部が流され、現在の「**江戸川**」が誕生する。下総国葛飾郡は江戸川で大きく分断されて、右岸は武蔵国葛飾郡となり、葛飾柴又は武蔵国東端の玄関口となった。

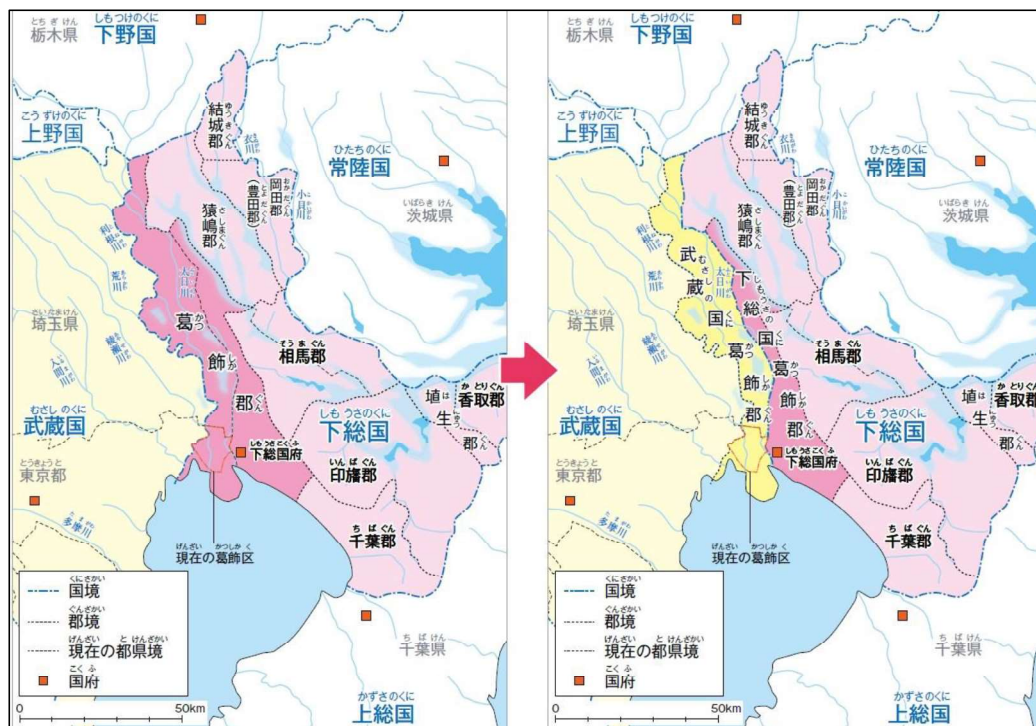


図5 下総国葛飾郡(古代・中世)から武蔵国葛飾郡(近世)へ

【国境としての江戸川と渡船場】

常陸^{ひたち}や下野^{しもつけ}、上野^{こうずけ}等の上流域の産物は、江戸川を經由して江戸へ運ばれるようになったが、葛飾柴又に舟運のための河岸が置かれるのは近世の諸規則が無くなる近代以降である。一方で、近郷住人のための渡船場は近世初期から設けられていた。渡船場は、「矢切の渡し」として引き継がれ、観光用に運航されている。大正年間の江戸川堤防拡張工事以前には、“上矢切の渡し”と呼ばれる渡船場がやや上流部にあった。

【渡船場につながる主要な陸路】（図7参照）

陸路では、次の4つの道が渡船場につながる近世の主要道であったと見られる。

- ① 水戸道から分岐して東に直線的に伸びる国分道
- ② 柴又八幡神社付近で①から分岐して南方を東に伸びるかつての国分道の一部
- ③ 佐倉道との交差点から北東に伸びて②に突き当たる古代東海道の脇道
- ④ かつての堤防上を南北に通る岩槻道
近世末期には特に①、②、④の沿道に建物が集まっていたと考えられる。



図6 帝釈天参道入口（左）と②の国分道の一部



堤外にも宅地や農地が開かれ、①が突き当たる現在の矢切の渡しの辺りには、葛飾柴又を代表する老舗料亭「川甚」(18世紀末頃の創業と伝わる)が江戸川に面して店を構えていた。また、②の沿道には応永14年(1407)創建と伝わる医王寺が境内を開いていた。

【近世の葛飾柴又と経栄山題経寺の創建】

近世の柴又村は、渡船による対岸近郷との人や物の行き来があり、船で江戸市中から下肥を購入して葉物野菜を生産し、江戸や周辺の宿場等に売りに行くような農村であったと考えられている。現在でも、寺社の由緒、伝統的な住宅の形式、イヌマキの生垣等、歴史や文化、自然における千葉県北西部との関連を随所に見ることができる。



図8 帝釈天題経寺

葛飾柴又は、「**帝釈天題経寺**」(図8)でつとに有名である。正式名称を経栄山題経寺とするこの寺は、国分道沿いに寛永6年(1629)に建立された。創建時は日蓮宗大本山の中山法華経寺(千葉県市川市)が本山であった。

葛飾柴又が江戸の後背地としての位置付けを高め、参詣地や遊興地として人を集めるようになるのは近世後期から近代にかけてである。そこには、「帝釈天題経寺参道の発展と鉄道の敷設」、「柴又用水の敷設と農地の拡大」、「人口増加等に伴う低地部の開発」という3つの主たる要因が見られる。

(4) 近世後期から昭和期にかけての発展・1

—帝釈天題経寺参道の発展と鉄道の敷設—

【帝釈天信仰・庚申信仰の高まり】

安永8年(1779)所在不明だった板本尊が発見されたのが契機になって、経栄山題経寺は江戸市中の人々や近隣の信仰を集めるようになり、庚申信仰の流行とも相まって参詣客を集め、帝釈天や帝釈天題経寺の通称で知られるようになる。明治20年代から大正期、昭和期にかけては伽藍が整備され、華やかな彫刻を持つ堂舎で境内が飾られていった。

上述の国分道(①)や古代東海道の脇道(③)も、帝釈天詣での隆盛に伴い「**帝釈道**」と呼ばれるようになる。18世紀末頃に後者の帝釈道からさらに帝釈天題経寺「**二天門**」へと南西に伸びる帝釈天題経寺参道が整備され、参詣客の増加に伴い農家が副業的に店を出し、これが常設化しながら門前町の様相を濃くしていった。起点には嘉永2年(1849)に建立された「**帝釈天王安置の碑**」が置かれ、参道沿いの料亭、草だんご屋、甘味処、煎餅屋等には明治期や大正期の創業を伝える老舗が見られる。

【鉄道の敷設】

帝釈天安置の碑が置かれる五叉路（元は四叉路）は、柴又八幡神社の門前にも当たる葛飾柴又の中心ともいえる場所である。明治32年には柴又八幡神社の東側に帝釈人車鉄道の駅（図9）として、また、大正元年には前述の五叉路に面する敷地に京成電気軌道（現在の京成電鉄）の駅として「柴又駅」（昭和62年改修）が開業し、「柴又駅前広場」（令和3年改修）と共に葛飾柴又の玄関口となって現在に至っている。

このようにして、戦前までには、柴又駅と帝釈天題経寺二天門の間に「帝釈天題経寺参道の両側の街区」（図10）が発展し、現在に通じるまち並みが形成された。



図9 帝釈人車鉄道 柴又停車場から帝釈天を望む



図10 帝釈天題経寺参道

（5）近世後期から昭和期にかけての発展・2

—柴又用水の敷設と農地の拡大—

【微高地における農地】

帝釈天題経寺及びその参道の発展は、周辺の農地の開発と大きく関係している。葛飾柴又における農地は、最初は微高地を中心に開かれた。とりわけ、上述①、②、④の沿道には早くから農家が敷地を開き、周辺を主に畑地として開墾し、農業を営んでいたと考えられる。このような中には、緩やかなうねりを持つ生活道が見られ、かつての河道や畔を想起させる。

微高地に敷かれる古くからの道や、かつての畦道の沿道に、農村の面影を残す「旧家」（図11）の広い屋敷地が点在して残ることも葛飾柴又の大きな特徴である。生垣や門、門冠りの松等を施した屋敷構えや、主屋の形式や間取り、井戸や祠等にかつての農家の生活や生業が伺え、また、川沿いには敷地の基壇を高く積んで水害対策とした様子等も見られる。



図11 納屋や主屋の南に庭を持ち、農家の敷地遣いを伝える旧家

【灌漑用水】

柴又南部の低地に耕地が広がったのは江戸時代末期以降で、「柴又用水」の開削を契機とする。柴又八幡神社内の文政9年（1826）の柴又勸農事績碑（図12）や明治6年（1873）の柴又用水の碑等によれば、柴又用水は鈴木幸七により天保6年（1835）に敷かれた。この頃の柴俣村は相次ぐ飢饉や洪水、天災で農民の生活は困窮を極め、名主達が質素倹約や勸農を働きかけ、荒れ地改良を進める等して村の復興に努めていたとされる。

柴又用水は小岩用水から取水したが、その水源である小合溜井（現在の都立水元公園）の水が不足し、天保14年（1843）に江戸川からも水を引き入れるようになった。その取水口は、元は舟運のための入江に設けられた^{いりひ}埵樋であったと古地図から察せられるが、大正期の江戸川改修事業後、昭和10年には新たな水路が設けられ、「**新八水路**」と呼ばれて現在にその跡を残す。元々は潮の干満に合わせて堰を開いて水を取り入れたと考えられるが、江戸川の水位の低下に伴い足踏み水車で、昭和期に入るとモーターで水が汲みあげられた。

【農地の拡大と中通り】

柴又用水は、国分道の南側、微高地の裾に沿って北西から南東に向かって幅6尺規模で敷かれた本流と、これから分岐する何本もの支流で構成されていた。支流は、低平地中央部では直線的に、周縁部では地形なりに敷かれ、順次、網状に張り巡らされていった。これに沿って広く水田が開拓され、葛飾柴又は江戸・東京という大消費地を支える農村地帯としての位置付けを高めていった。

この時を契機に既存の農地と新規開拓地の境界に発達し、佐倉道の新たな脇道になった道が南北方向の「**中通り**」（図13）である。この通りにも旧家の屋敷地が残る。帝釈天題経寺では明治期の伽藍整備において、中通り沿いに「**帝釈天題経寺墓苑**」として墓地を移し、北に隣接する敷地には、関東大震災で伽藍を焼失した「**宝生院**」が昭和2年に境内を移した。堤外にあった医王寺も、大正4年の江戸川堤防拡張工事に伴い、帝釈天題経寺墓苑の向かいに境内を移している。しかし、北総鉄道の新柴又駅が平成3年に開業されることに伴い、中通りは新柴又駅を起点とする道となり、医王寺の境内は縮小して、高架線路で帝釈天題経寺墓苑等と隔てられた。



図12 柴又勸農事績碑



図13 旧家や寺の緑が豊かな中通り

(6) 近世後期から昭和期にかけての発展・3

—人口増加等に伴う低地の開発—

【葛飾柴又の人口の推移】

葛飾柴又の人口・戸数は、正保3年(1646)には209人・49戸であったところ、明治元年には509人・100戸、大正9年には920人・155戸、昭和10年には2,073人・624戸、昭和25年には6,649人・1,541戸と、特に大正期の終わり頃から飛躍的に増え、戦後はさらに拍車がかかる。背景には、鉄道の発達、大正12年の関東大震災後の転入、昭和7年の東京市への編入等が窺えるこの人口動態の中で、葛飾柴又の農地は住宅地へと転じ、景観も変わっていった。

【金町浄水場】

大正15年(昭和元年)には「**金町浄水場**」が設けられて、南葛飾、南足立、北豊島3郡の12町村を給水区域とする江戸川浄水町村組合の施設として給水が開始された。江戸川に建つレンガ造の「**取水塔**」(昭和16年及び昭和39年建築)は、葛飾柴又のランドマークの一つとなっている。

金町浄水場の南側には、道路を挟んだ敷地に「**水神様**」が祀られている。これは、昭和11年から同23年の浄水場拡張工事に伴い移築されたもので、毎年11月3日に帝釈天題経寺の「**御神水**」と一緒に祭礼が行われている。この御神水は、帝釈天題経寺の縁起とも関わる霊水で、現在も清水が湧き出している。

【耕地整理事業や土地区画整理事業と道路割り】(図14参照)

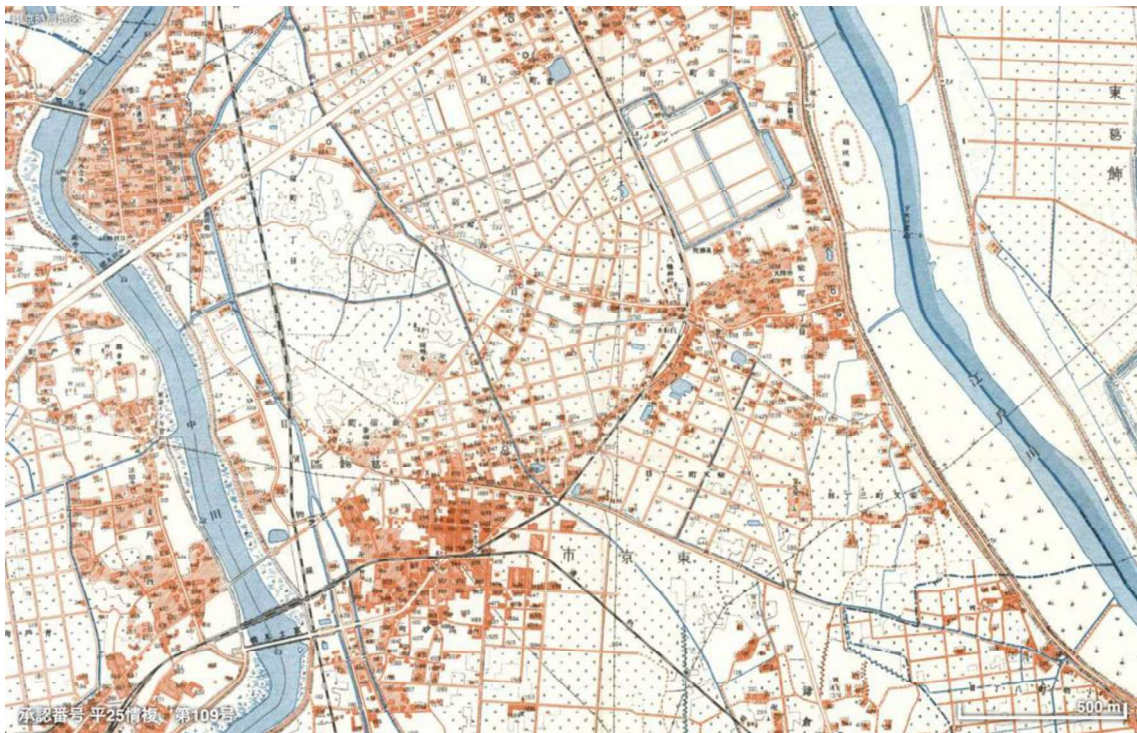


図14 昭和戦前期(昭和3~14年)地形図

現在の葛飾区の区域では、明治 35 年から耕地整理事業や土地区画整理事業が開始された。葛飾柴又でも、大正末期から昭和初期にかけて実施され、農業の生産性が大きく向上した。この時の影響により、葛飾柴又には大きく 3 つの道路パターンが見られる。

一つ目は、金町浄水場と柴又用水に挟まれる微高地及び中通りと江戸川堤防に挟まれる微高地で、旧河道等に影響を受けた地形の特徴を表す道が残り、不整形な街区が混じる。二つ目は、京成電鉄の線路より西側及び金町浄水場の北側である。大正 14 年から昭和 2 年にかけて行われた金町耕地整理事業の区画割を引き継ぎ、街区は京成電気軌道の線路に合わせて碁盤目状に割られている。三つ目は柴又用水の南側、京成電鉄の線路と中通りに挟まれる地区で、昭和 3 年から 5 年かけて行われた金町柴又第一耕地整理事業の区画割を引き継ぎ、街区は佐倉道と方向を合わせた碁盤目状に割られている。

(7) 時代ごとの賑わいの創出

【時代の変化の中で生まれてきた名所】

近代以降、葛飾柴又には、幾つかの大きな景観の変化があった。明治 32 年から大正元年にかけての京成電気軌道の敷設、江戸川堤防の拡大事業（大正 4 年）に伴う建物の堤外から堤内への移設と河川敷の公園化、耕地整理事業（大正期から昭和前期）と金町浄水場の建設（大正 15 年）等である。

このような中で、周辺では灌漑用水が工業用水としても用いられるようになり、明治期から大正期にかけて染織工場や化学工場、機械工場等が建ち始める一方、葛飾柴又では、農地の多くが住宅地に転じていった。関東大震災まであった瓦工場は、江戸の防火対策として瓦の需要が高まる中で天保 3 年（1832）に創業したものである。跡地にはカメラ部品等の金属加工を扱う合資会社山本工場が工場と居宅を移した。近代和風の建物と和風庭園が調和するその屋敷地は、「山本亭」（図 15）として葛飾区が昭和 62 年に所有し、平成 3 年より公開している。山本亭は、平成 15 年に東京都景観条例に基づく都選定歴史的建造物とされた。その前年には、帝釈天題経寺「大客殿」が選定されているところである。



図 15 山本亭

寺地の移動や転入等も見られる。前述の医王寺や宝生院のほか、金町浄水場の敷地にあった「良観寺」、昭和 5 年開基の「萬福寺」等であるが、このような地域の寺が所在し、徒歩で楽しめる新たな名所巡りとなっている。

寺地の移動や転入等も見られる。前述の医王寺や宝生院のほか、金町浄水場の敷地にあった「良観寺」、昭和 5 年開基の「萬福寺」等であるが、このような地域の寺が所在し、徒歩で楽しめる新たな名所巡りとなっている。

【柴又ルネサンス元年】

昭和 44 年に映画『男はつらいよ』の第 1 作が公開されると、寅さん人気の高まりは

帝釈天題経寺参道に観光客の増加をもたらす一方、店舗の改築・改修も招いた。柴又帝釈天参道商店街神明会（以下「神明会」という。）は、まち並みを保存するため、昭和63年に自主協定として「帝釈天及び参道の景観保全に関わる指導基準」を作成した。また、これを契機として東京電力とNTTが帝釈天題経寺参道の電線の地中化を図り、参道の舗装が御影石敷きに改修された。葛飾区では、これと時期を合わせ、地元の要望に基づき、和風修景を施した「**公衆便所**」を平成元年5月に建設した。神明会では、平成元年を「柴又ルネサンス元年」とし、5月中旬に盛大にイベントを開催している。この一連のことは、新聞でも大きく報道されている。

【新たな魅力の創出】

映画『男はつらいよ』が平成7年でシリーズを完結し、観光客数が落ち込む傾向を見せ始める中で、葛飾柴又では寅さんの余韻を残しつつ、新たな魅力を創出するための様々な取組が官民を挙げて行われてきた。神明会では募金を集めて平成11年に柴又駅前広場にフーテンの寅像を設置している。

平成9年には、江戸川河川敷及びその周辺の柴又公園の整備の一環としてレンタサイクルや地域災害対策活動拠点の役割を兼ね備える葛飾区観光文化センターが開設され、一部は「**葛飾柴又寅さん記念館**」となっている。帝釈天題経寺参道の起点には、寅さんを演じた渥美清寄進の「**常夜燈**」及び映画監督・山田洋次揮毫による「**映画の碑**」（図16）が建てられている。

平成10年代からは、また、景観誘導と一体となった新たな観光まちづくりが推進されている。この背景には、周囲と調和しない規模や意匠・色彩等による建築が目立ち始めたこともある。参道沿いにもマンション建設の計画が生じた。

帝釈天題経寺参道は、平成16年に東京都の「東京のしゃれた街並みづくり推進条例」に基づく「街並み景観重点地区」に指



図16 映画の碑

定され、前述の自主協定は「柴又まちなみ景観ガイドライン」として平成20年2月20日付けで東京都によって告示された（東京都告示第170号）。平成19年にはこの運用主体としてNPO法人柴又まちなみ協議会が設立されている。

このような取組が評価され、平成21年には「葛飾柴又帝釈天参道周辺のまちなみ」が、景観整備・まちづくり・地域活性化の視点から、公益財団法人日本デザイン振興会の「グッドデザイン賞」を受賞した。平成22年には、国土交通省が定めた都市景観の日（毎年10月4日）に都市景観の日実行委員会が実施する「都市景観大賞」において、「美しいまちなみ特別賞」を受賞した。平成24年には山田洋次監督作品の魅力を伝える「**山田洋次ミュージアム**」を観光文化センター内に開設した。

【文化的景観の中核を成す特質】

このように葛飾柴又では、道と川、近代以降は鉄道により人の往来がもたらされる中で、帝釈天題経寺門前を中核とする賑わいを高め、時代ごとに名所を増やし、その利益を地域で享受してきた。また、このことが葛飾柴又らしさを守り、育てる住民の意欲を支えてきた。この歴史風土に根付いた産業振興と景観保全の循環こそが、「葛飾柴又の文化的景観」の中核を成す特質なのである。

3 葛飾柴又らしさ

(1) 保存計画における3つのリング

「葛飾柴又の文化的景観」の特徴は、保存計画では「江戸・東京と房総・北関東という2つの流れが結節する場所としてのノード性(場所性)」、「都市・農村の両義性」、「参詣客を意識して変貌してきた建築・空間の流動性」として、その地形と立地、これに即した土地利用の発展、この発展の中でもたらされたまち並みの特徴に分けて説明している。

また、このことを踏まえ、「葛飾柴又の文化的景観」を次の3つのリングに分けて、保存や整備の方針等を示している。

- 第1のリング：微高地の中心に位置し、帝釈天題経寺及び門前からなる空間
- 第2のリング：第1のリングの周囲で江戸川河川敷沿い及び国分道沿いにかけて広がる微高地からなる帝釈天題経寺と門前を支えたかつての農村部（微高地）空間
- 第3のリング：微高地（第1のリング、第2のリング）の周囲で近世以前は主に水田として、そして近代以降に市街地化の進展した低地からなる大都市近郊の低地開発の歴史を伝える空間

(2) 地域住民が思う葛飾柴又

葛飾区教育委員会が令和3年7月から8月にかけて実施したワークショップ（本計画の第1章第6節（4）参照）においては、参加者から次のような意見を得た。

以下『『葛飾柴又の文化的景観』ワークショップ便り』令和3年7月第1回開催概要及び令和3年8月第2回開催概要から一部を抜粋

【環境・景観】

- 昔は、帝釈天の庭でよく遊びましたが、江戸川の水がきれい、泳いだり、魚釣りもしました。
- 子どもたちは安全な帝釈天でよく遊んでいます。
- 今でも空気がきれいで閑静であり、行事が多く、人情味が豊かで、人とのつながりを大事にする気質があります。

- 空気がきれいで、土手に上がって夕日を見ると心が落ち着きますし、東京近郊でありながら、田舎とも思えるのんびりした風景は癒しになります。
- 江戸川の土手から見えるいらか（藪）の景観も自慢できます。
- 一面に田や畑が広がっていたので、高砂駅が見えるほど開けていました。その田や畑は減ってしまいましたが、下水道が整備されたことで、水があふれることもなくなりました。
- 新柴又駅ができたことで回遊性も多様になり、観光客に癒しを与えるために観光地区懇談会が花を植えています。

【地域社会】

- 柴又の人は、人情に厚く、人とのつながりを大切にしている点も他の地域にはない良さだと思います。
- 子供達が参道を通ると「お帰り」と声かけをしてくれて、地域全体が家族のように子育てしている環境があります。
- 門前は昔から仲がよく、仲間意識や連帯感もあって、お互いに「あれは（注：建物や景観のこと）おかしいんじゃないか」などと言い合える間柄です。
- 商店どうしのつながりだけではなく、八幡神社の氏子を通して、近隣の農家や住民との深いつながりがあります。

【帝釈天題経寺参道】

- 参道の幅員が丁度よく、直線ではないところや統一されすぎでない自然な街並みに魅力があると思います。
- 昔の「宵庚申」では露店が立って、多くの人で賑わっていました。
- 近年は寅さんに関連する観光客が主体になっています。
- 現在は夜になると帝釈天が閉まるので、店も閉めていますが、提灯を統一するなど、夜の景観づくりに努めています。
- 柴又の食文化を担っているという自負があります。

（3）葛飾柴又らしさ

3つのリングで表現される「葛飾柴又の文化的景観」の特徴と、地域住民の心に残り、伝えたいと思う葛飾柴又の良さの関連性に着目しつつ、「都市と田園」、「伝統の継承」、「内と外の文化交流」という視点から、「葛飾柴又らしさ」について整理する。

【都市と田園】

葛飾柴又では、渡河地点に向かって微高地に道が通され、その沿道に農村が形成され、その中に信仰を軸とする町筋が発展してきた。また、その北部及び南部には農地から転じた市街地が広がる。

「葛飾柴又らしさ」の一つは、川が近く、柴又八幡神社を歴史の起点とし、帝釈天とその参道を発展のシンボルとしながら、その周辺に農村を由来とする緑豊かな低層の住環境が広がることにあり、江戸川土手から見る藪の景色、青空の広さ、空気の良さにも繋がっている。



図17 江戸川上空から柴又のまちを俯瞰（平成30年ドローンで撮影）

このような「葛飾柴又らしさ」を表すものとしては、第1のリング、第2のリング、第3のリングとしてのそれぞれの景観のまとまりや、時代ごとの発展を伝える重要な構成要素等が挙げられる。

【伝統の継承】

葛飾柴又では、時代が移り変わる中でも、祭礼や年中行事、名物料理、名産品のような文化が発展し、人々に大事に受け継がれてきた。このような文化は、また、地域社会の縦の繋がりや横の繋がりを保ち、地域内流通を支え、顔が見える生産活動を促し、地域を支える次世代を育んできた。



図18 柴又八幡神社の神獅子

地域の内外が共に認める「葛飾柴又らしさ」は、人情や下町情緒という言葉が似合うまちという点にあるが、地域文化が介在する人と人との交流と言い換えることもできよう。

このような「葛飾柴又らしさ」を表すものには、柴又八幡神社等の祭礼（図18）や年中行事、川魚料理や草だんご、煎餅、漬物等の地場産品を用いた（かつての地場産品に由来するものを含む。）特産品、弾き猿^{はじざる}といった郷土玩具等が挙げられる。

伝統や人情、下町情緒のようなものは定性的或いは主観的な側面を持つが、葛飾柴又においては、昭和44年から平成7年までの26年間に48作品が公開された映画『男はつらいよ』の中にそれが記録されており、昭和の時代から引き継ぎたいものを地域が確認できる手段を持つ点で独特である。

【内と外の文化交流】

水陸交通の結節点として栄えた葛飾柴又においては、外の文化の影響を様々に受け、積極的に取り入れてきた。

「葛飾柴又らしさ」の一つは、地域内で互いに気遣い合いながらも、細部では外の文化、新しい文化を積極的に捉える気風にある。

このような「葛飾柴又らしさ」を表すものとしては、日光東照宮（栃木県日光市）や歓喜院聖天堂（埼玉県熊谷市）の関東の内陸部の寺社彫刻と、南房総地域の寺社彫刻の影響が窺える帝釈天題経寺の堂舎の彫刻（図 19）、松戸から曳家されたと伝わる帝釈天題経寺参道の店舗、下総の農家の特徴が窺える帝釈天題経寺参道の店舗、旧家の生垣に用いられるイヌマキ（図 20）等が挙げられる。



図 19 彫刻が凝らされた二天門

（4）葛飾柴又らしさを象徴するもの

葛飾柴又の歴史は柴又八幡神社を無くしては語る事ができず、その発展は地形と道と川を無くしては語る事ができない。同様に帝釈天題経寺とその参道のまち並みは、上記の3つの葛飾柴又らしさを総合的に伝えるものとして重要である（図 21）。

例えば、そこに住まいながら製造し、販売している店舗や、参道に通じる路地等は、都市と田園（かつての農家・農地との関係性等）、伝統の継承（食文化、店頭での対面販売等）、内と外の文化交流（来訪者との交流等）の3つの「葛飾柴又らしさ」全てを包含し、目に見える形で伝えている（図 22）。今後の発展における環境や景観への配慮、伝統の継承と発展、新たな知見や文化の摂取を考える上でのモデルとなるものである。



図 20 イヌマキの生垣が連なる通り



図 21 地域内外の人々の信仰、文化、交流の場であり続ける帝釈天題経寺

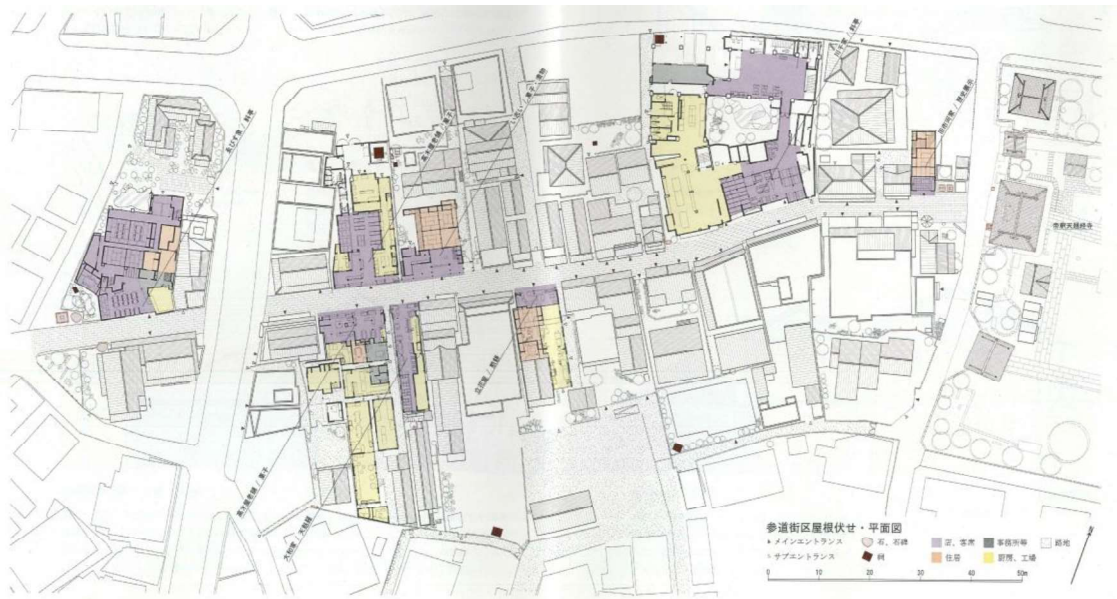


図22 帝釈天参道の両側の街区その敷地利用

4 景観単位別（3つのリング）の特徴と価値

保存計画においては、3つのリングと共に、景観のまとまりごとに7つの景観単位を設けて保存や活用、整備の方針を立てている。その特徴は以下のとおりである。

(1) 【第1のリング】 帝釈天題経寺と門前からなる空間

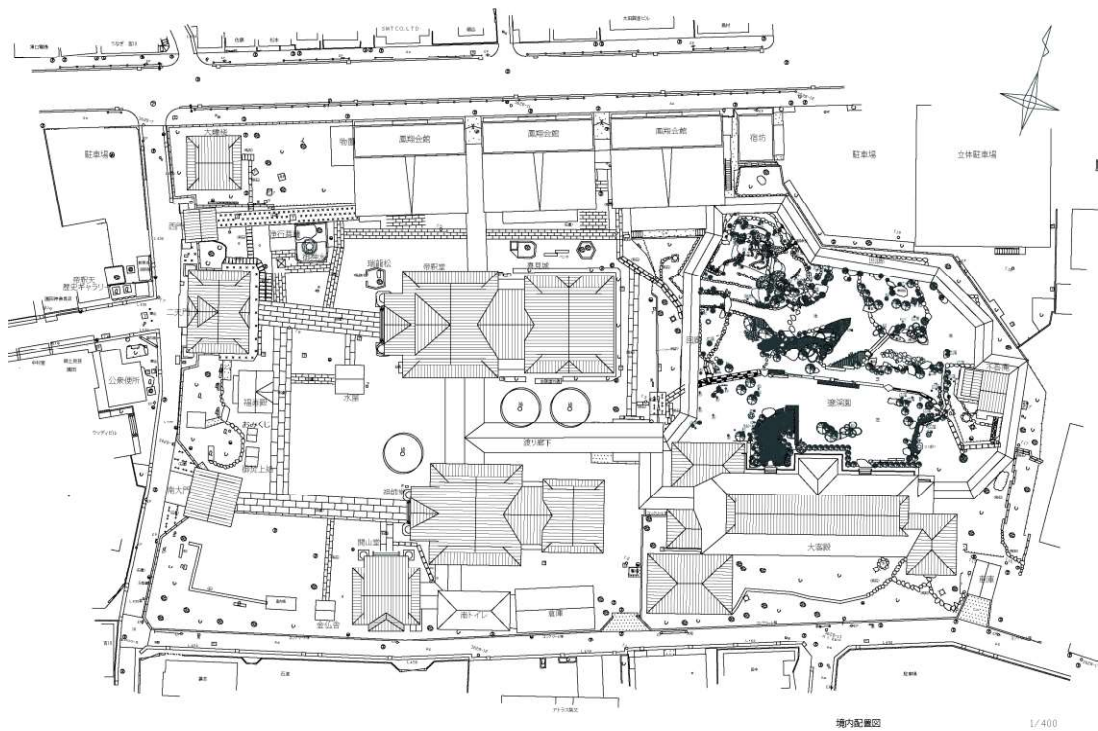


図23 帝釈天題経寺境内配置図

①帝釈天題経寺境内

<概要>

帝釈天題経寺は17世紀前半に創建されたとされ、18世紀末に庚申信仰により参詣客を集めていった江戸近郊の流行寺の一つである。江戸時代から近代にかけて、旧堂を改造、移築しながら新堂を加える独特の造営過程によって整えられたもので、葛飾柴又の文化的景観の核を成す寺院である。西を正面とする境内には図23のように、西半部に権現造の「帝釈堂」(図24)と「祖師堂(本堂)」を始めとする堂宇(図25)が並び、東半部は大客殿と「邃溪園」で構成される大規模かつ複合的な、近世から近代にかけて庶民参詣で賑わった寺院らしい景観を見せている。

<主な特徴> (図28)

- 帝釈天題経寺では、既存の堂宇を移築、転用しながら新增改築を行ってきた。例えば、祖師堂の拝殿にはかつての本堂が、釈迦堂にはかつての祖師堂が利用されている様子が窺える。寺の創建の由来と伝わる御神水や「瑞龍のマツ」を始め、境内景観が、信仰の展開過程を一本の糸のように語り継いでいる点が、一つの特徴となっている。
- 堂宇の屋根には、地元で焼かれた「柴安」瓦が用いられており、かつての産業を伝えている。
- 堤防から眺める葺の屋並みの中に、諸堂の屋根が小高く並び(図29)、景観の特徴を成している。



図24 帝釈天題経寺帝釈堂



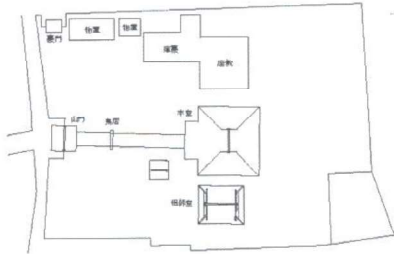
図25 帝釈天題経寺祖師堂(左)と開山堂



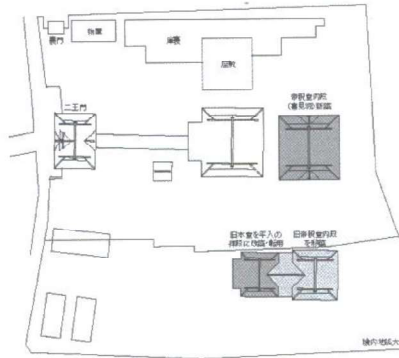
図26 帝釈天題経寺の諸堂



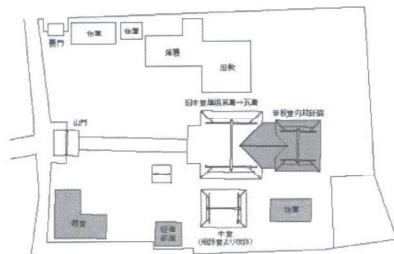
図27 帝釈堂の法華経説話彫刻



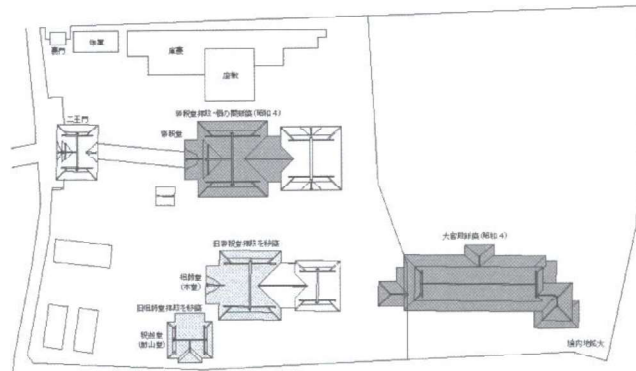
①安永8年～文化・文政期



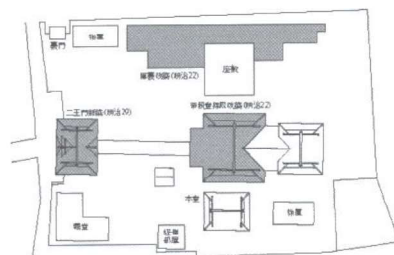
⑤明治末～大正4年



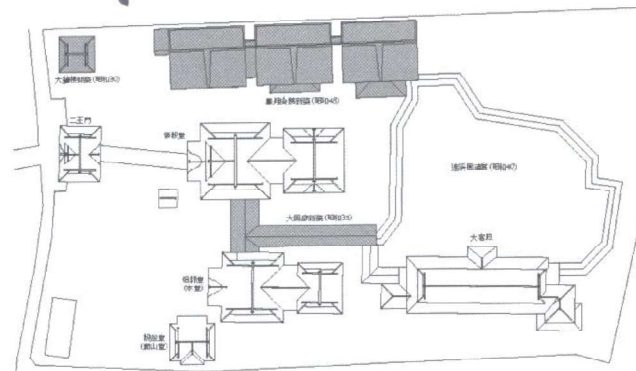
②幕末～明治初期



⑥大正末～昭和4年



③④明治22～29年



⑦⑧昭和30～48年

図28 帝釈天題經寺諸堂變遷図



図 29 山本亭の奥（写真右中ほど）に並ぶ帝釈天題経寺の堂宇の屋根

②帝釈天題経寺門前

<概要>

自然が豊かであった葛飾柴又は、江戸時代後半に、帝釈天詣でと共に行楽地として江戸市中の人々に知られるようになった。参道には、元々は庚申の日等の特別な日に仮設的な店舗が並び、これがやがて常設化して、地元の米を使った草だんごや煎餅等売る店舗や、江戸川で獲れた川魚等を名物とする料亭等が建つようになったと考えられている。大正期の鉄道敷設はさらに多



図 30 参道沿いの建物は、各敷地の間口の幅を反映し、参道側に、瓦屋根を下す平入りと、三角形の壁面を見せる妻入りが混在する。

くの来訪者をもたらし、門前には店舗が増え、昭和初期までには今のように建物が連坦するまち並みが見られるようになった。2間規模から5間を超えるものまで大小が入り混じる。早くから都市化した他の寺社の門前とは異なる趣を見せる。

- 沿道の店舗の規模等: 建物は、江戸時代末から昭和初期までのものが残され、戦後に建てられたRC造等も混じるが、全体として参道沿いは低層に抑えられているため、空が広く見える。また、伝統的な看板を掲げた庇や、看板建

築が並んで賑やかさを醸し出し、伝統木造を基調とする門前町としてのゆるやかな統一感をつくりあげている。

- 店先の商い空間：店先には庇の下に陳列棚や調理台等が置かれ、売り子が呼び込みの声をかけながら参詣者と直接コミュニケーションをとって売る、いわゆる対面販売が行われている。この店先の商い風景が自他共に認める葛飾柴又らしい光景の一つとされている。陳列棚や調理台等は、夜間には片付けられ、毎朝整えられる。
- 敷地の使い方：比較的大きな敷地においては、店舗に店先の呼び込みの場、売り場、客席が参道から奥へと連続し、さらに奥側には住居や工場があり、売る・住む・作るという機能が複合している。敷地の正面（参道側）から背面（裏側）に通じる通路（図 32）を持つものが多いことも特徴である。また、商売繁盛や家内安全を祈念する祠を置く敷地が多く見られる。祠は大小様々である。
- 店舗の特徴：店舗の中には、かつては仮設的な設えであったことを思わせるような奥行の浅いものや、納屋を改修したようなものが見られる。また、表長屋風の店舗、前土間を大きくとり、床部を四ツ間とする農家の間取りを思わせる店舗等が見られる住居が合体した店舗もある。実のなる木が見られること等も含め、全体として農村の面影が見られる。



図 31 開放的な店構えを実現する太い差物（黄色の囲み部分）が、屋根や庇と共に、参道の方向性を強調する効果を生み出している。



図 32 奥行の長い敷地に設けられた通路

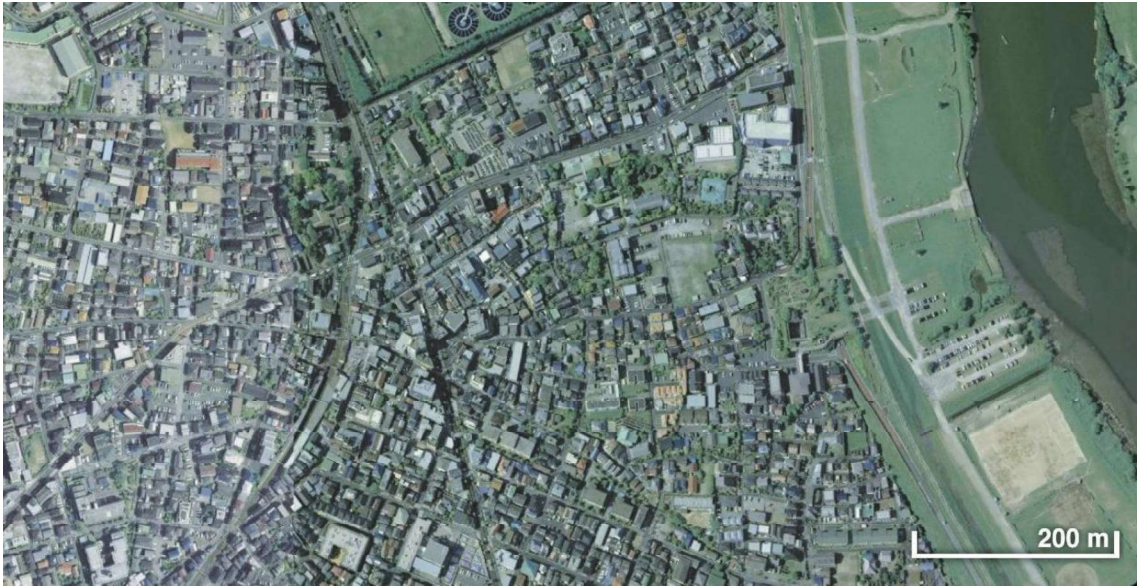


図33 柴又地域航空写真（平成19年撮影）



図34 帝釈天参道と門前店舗の関係

(2) 【第2のリング】 帝釈天題経寺と門前を支えた かつての農村部（微高地）空間

①国分道沿い

<概要>

微高地上に発達した農村由来の市街地であり、古来より街道からの脇道が渡河地点に向かって発達したことを歴史の基層とする。特に、水戸道から分岐し、柴又八幡神社の前で帝釈天題経寺境内を挟むように南北に分かれる国分道はその中核を成すもので、この沿道及び江戸川河川敷沿いに寺社や旧家がまとまって存在する。

<主な特徴>

- 鎮守の柴又八幡神社や古刹の真勝院には、多くの記念物や文化財が所在し、葛飾柴又の歴史を語る上で欠かすことができない。また、祭礼等が継承されていると共に、樹木が豊かな境内は良好な都市環境を保つ上でも重要である。
- 旧家には、主屋、屋敷構え、境界装置等にかつての農家としての特徴が見られる。市街地の歴史を伝えると共に、緑豊かな市街地形成に寄与している。

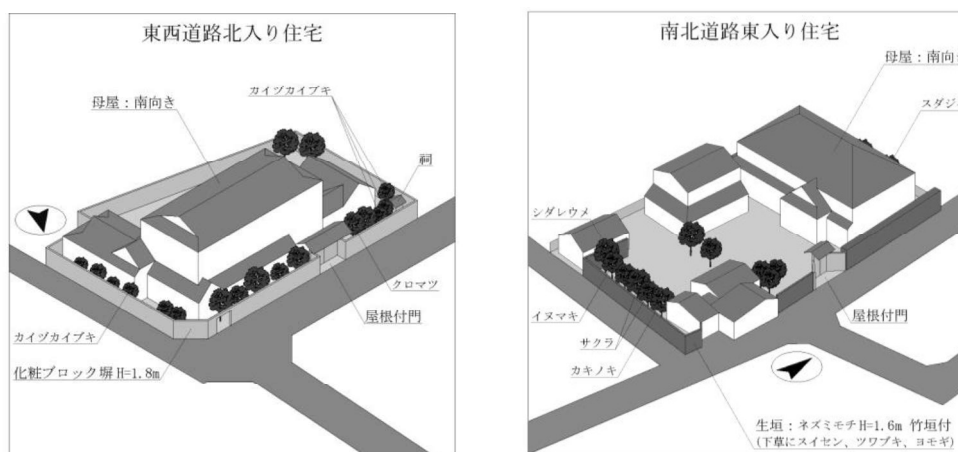


図 35 旧家の敷地と配置構成

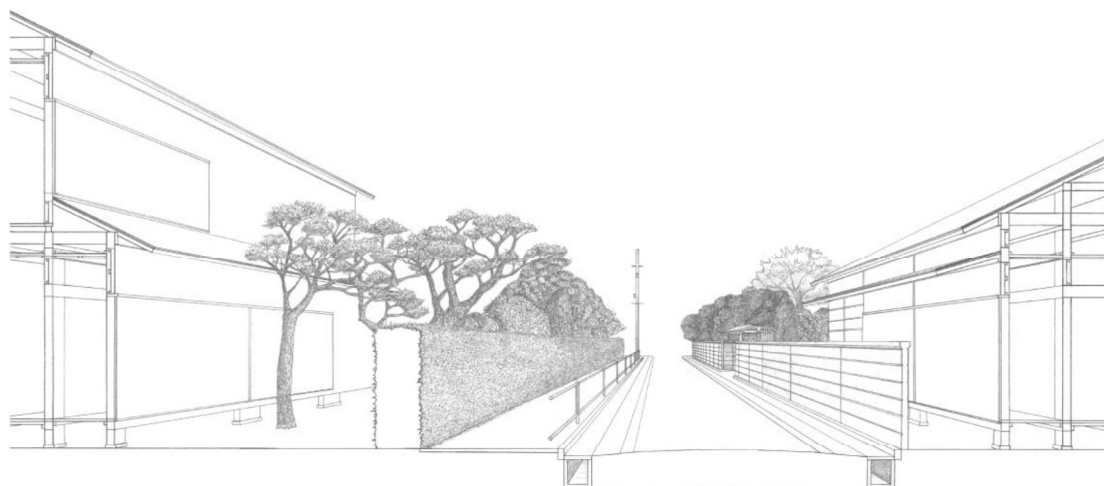


図 36 旧家の建物と道路の断面構成

②帝釈天題経寺南方・江戸川河川敷沿い

<概要>

帝釈天題経寺の南側から江戸川河川敷に沿って、旧家が存在する。江戸時代の農地開発に関わり、比較的早くから屋敷地を構えていたものが多い。

大正年間の江戸川河川改修、昭和初期の耕地整理事業、戦後の宅地化、昭和50年代以降の柴又用水の暗渠化等を経て、現在は都市内農地を含む住宅地となり、江戸川の土手に沿っては柴又公園が河川敷と一体的に整備され、園内では山本亭が公開されると共に、葛飾柴又寅さん記念館や山田洋次ミュージアムが設けられている。

<主な特徴>

- 国分道沿いに比べると、敷地形状は不整形で、敷地規模や屋敷構えが大きい。敷地全体や家屋周辺に盛り土をし、水害対策を見せるものもある。
- 屋敷地には、主屋が前庭に面して南向きに配され、生垣や石塀、植栽等を囲障として廻らして門を設ける、農家に典型的な敷地遣いが見られる。門冠の松、スダジイ、クスノキ、イチョウ、ケヤキ等の敷地内の樹木が屋敷景観の特徴をつくり、屋敷神を祀る祠が葛飾柴又の習俗を伝えている。
- 主屋の中には、屋根に反りをもたせるものもあり、門構え等と共に旧家の風格を表している。
- 江戸川の土手は、市街地や江戸川を見渡せる眺望点となっており、広大な柴又公園の中で、文化観光施設が集まるエリアとなっている。



図 37 門冠の松と生垣を持つ旧家



図 38 農家の敷地と畑を画する樹木

(3)【第3のリング】大都市近郊の低地開発の歴史を伝える空間

①柴又用水受水域

<概要>

微高地の南側に位置し、天保6年(1835)に開削された柴又用水によって主として水田の面積と生産性が飛躍的に高まったエリアである。柴又用水及びその支流が流れ、現在では埋め立てられてしまったものの、その痕跡を残している。

大正から昭和初期にかけて大半の場所で耕地整理事業や土地区画整理事業が行われている。江戸川の河川改修に伴い堤内に移転した寺院が見られる等、低地

開発の経緯を示している。柴又用水は、戦後に埋め立てや暗渠化が行われている。

<主な特徴>

- 低地開発の歴史を伝える寺社や旧家が残る。
- 柴又用水跡は、歩道に置き換わっているところが多い。所々に用水の痕跡を残し、各リングを繋ぐルートとしての高い可能性を有している。

②金町浄水場付近

<概要>

微高地の北側に位置し、大正15年(1926)8月に竣工した金町浄水場と江戸川上の取水塔(図39)からなる。大都市近郊における近代の低地開発の一例を示すものであり、近代建築もいくつか残されている。

<主な特徴>

- 広大な敷地に高い建造物や構造物が集中せずに視界を遮るものが少なく、江戸川土手からの遠望を可能としている。
- 金町浄水場の取水塔は、葛飾柴又のランドマークとなっている。



図39 金町浄水場取水塔と江戸川

③江戸川・河川敷

<概要>

近世には「坂東太郎」や「小利根川」とも称され、大都市江戸を支えた江戸川は、その河川景観と共に東岸に形成された微高地に集落が営まれ、舟運や渡河交通の拠点として栄えた。大正年間に河川改修が行われ、河川敷に所在した農家や寺院の多くは、堤内の柴又用水よりも南側に移った。現在は、堤、遊歩道、スポ

ーツグラウンド、駐車場等からなる広大なオープンスペースとなっているが、江戸川河川敷の広場はレクリエーション・スポーツの場として、柴又公園として平成3年に整備されたもので、区が維持管理している。

また、柴又公園の河川敷にある新八水路は、江戸川に生息する魚類、水生昆虫及び底生生物等が生息する江戸川の豊かな水辺環境が保全されており、河川敷の水辺景観にアクセントをつける存在となっている。

<主な特徴>

- 江戸川土手からは、西に、眼下に葛飾柴又のまちの麓を望み、東京スカイツリーや富士山等のランドマークと共に、遠くに都心部の高層ビル群を望むことができ、東京の中の葛飾区や柴又の位置を確認することができる。
- 東に目を移すと、江戸川の雄大な流れや河畔等の河川景観やその背景に控える下総台地の緑豊かな崖線、さらに北東には筑波の峰を眺めることができ、ビューポイントとしても重要な存在となっている。
- 矢切の渡し（図40）が継承され、現在でも観光用に運航されている。
- 新八水路は、かつての柴又用水の江戸川からの取水口でもあり、堤内にあった「柴安」瓦の窯場への粘土・燃料の搬入や製造された瓦の搬出等の船が行き来した水路としても利用されたもので、低地開発や舟運の名残をとどめている。

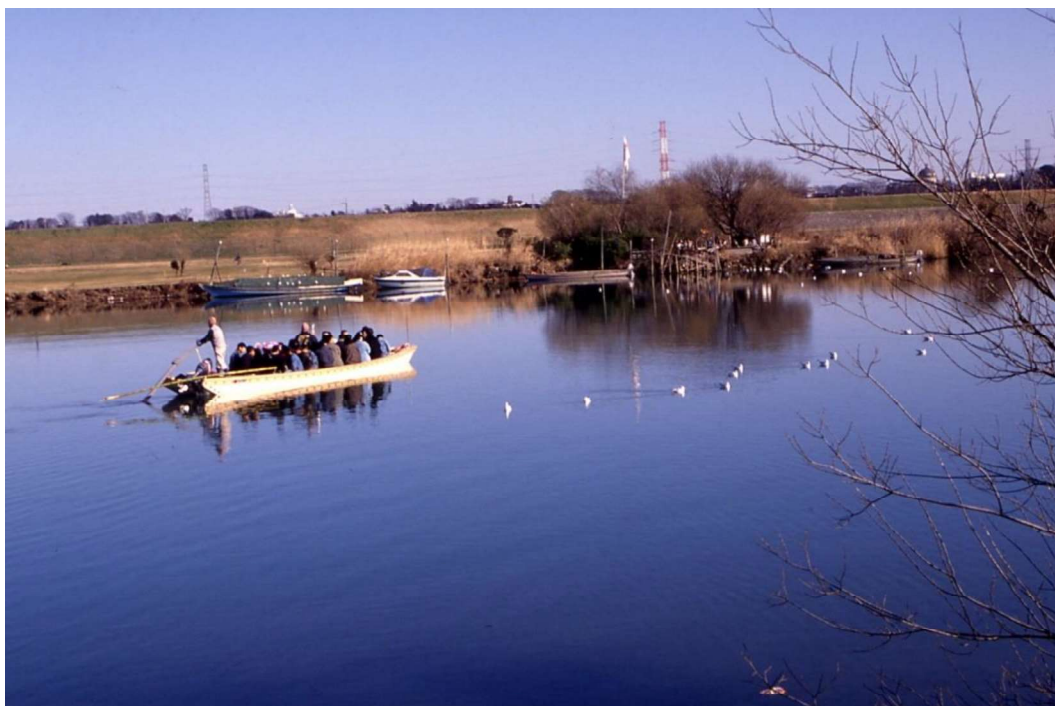


図40 矢切の渡し